

ラージャクマール碑文は、1113年に当時現在のビルマ（ミャンマー）を治めたパガン王朝のチャンズイッター王の王子、ラージャクマール（現代ビルマ語読みではヤーザクマー）が作らせた碑文である。

1886-87年にパガン近郊のミンガバー村にあるミャゼーディー寺院の北側で、英領ビルマ政府考古学研究所であった E. Forchhammer によって発見されたことから、最初は「ミャゼーディー碑文」と呼ばれていたが、現在では作らせた人の名を取って「ラージャクマール碑文」、あるいはこの碑文が実際に建てられたと考えられる寺院の名に因んで「ミンガバー＝クービャウッチー碑文」と呼ばれるのが普通である。

ラージャクマールは、父王が病気で世を去ろうとする時、これまで自分を育ててくれた父王の恩をしのび、黄金の仏像を納めた寺院を建て、その寺院に土地や奴隷を寄進した。ラージャクマール碑文はその事跡を記したものである。

興味深いのは、上記の事跡を、四方柱の各面にそれぞれ異なる4つの言語で記しているという点である。その内訳は次のとおり：

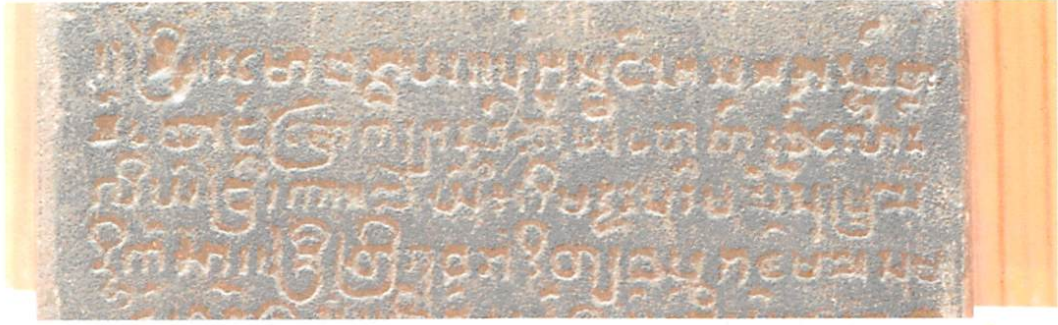
1. ビルマ語。チベット＝ビルマ系に属する。ビルマ語がモン文字をもとにして書き表されるようになったのは、パガン王朝が成立した11世紀中頃と考えられる。この碑文のビルマ語面は、現存する中では最も早い時期に書かれたビルマ語資料の一つである。
2. モン語。モン＝クメール系に属する。モン人は今でこそタイ・ビルマに居住する少数民族に過ぎないが、かつて東南アジア大陸部にドヴァーラヴァティー・ハリブンチャイ・ペグーの各王国を建国し、高い文化を誇った。モン文字は南インドのパッラヴァ文字の流れを引き、ビルマ文字をはじめ、北タイのランナー文字、ラオ

スのタム文字、雲南のタイ＝ルー文字、東北インドのアホム文字、ビルマ国内のシャン文字やカレン文字など数多くの文字の原型となった。

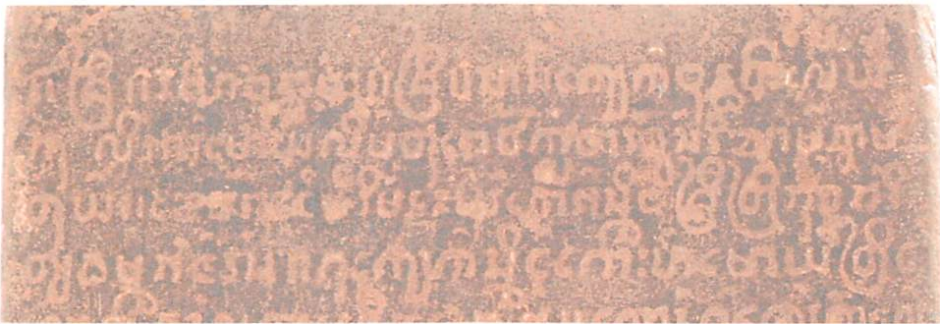
3. ピュー語。チベット＝ビルマ系に属するとされる。ピュー人は2世紀頃より、上ビルマのハリンジ、中ビルマのベイツタノー、下ビルマのシュリークシェートラなどに都市国家を築いていたが、彼らの国家は9世紀の中頃に南詔王国によって滅ぼされたとされる。この碑文のピュー語面は、国が滅びた約3世紀後に書かれたものということになる。ピュー文字はモン文字あるいはビルマ文字と異なる形としくみを持つが、インド起源である点は変わらない。
4. パーリ語。中期インド＝アーリア語（プラークリット）を代表する言語で、上座部仏教の經典語。パーリ語は上座部仏教の伝わった民族の固有の文字を用いて書き表されるのが常であり、この碑文でもビルマ文字（あるいはモン文字）によって書き表されている。

なお、ラージャクマール碑文には、実は A 碑文と B 碑文の2つがある。この画像は A 碑文のもので、パガン考古学博物館の1階碑文展示室に置かれている。ミャンマー連邦文化省考古学局パガン分局およびパガン考古学博物館の厚意により撮影が可能となった。B 碑文は発見地ミャゼーディー＝パゴダの基壇に保管されている。A 碑文の方が状態が良い。

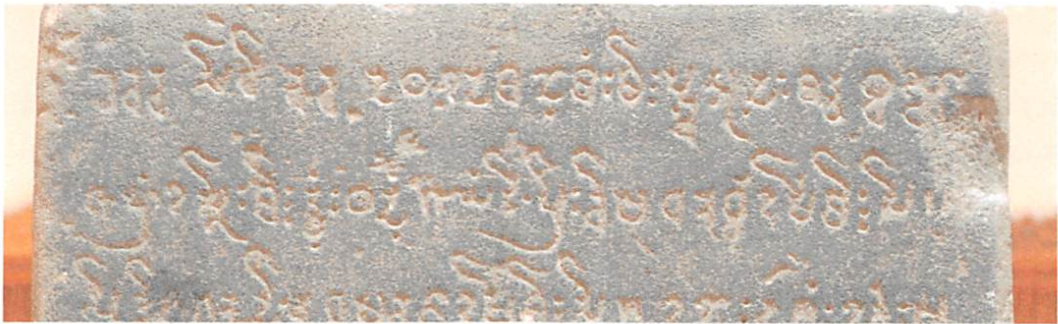
澤田 英夫
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所



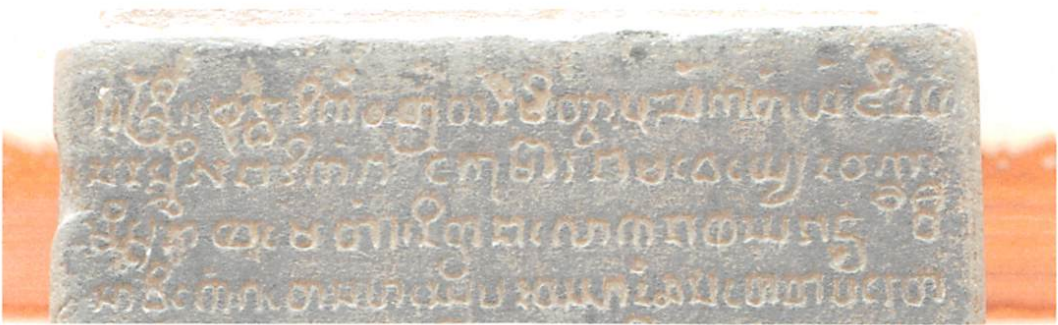
【ラージャクマール碑文】 ビルマ語面



【ラージャクマール碑文】 モン語面



【ラージャクマール碑文】 ビュー語面



【ラージャクマール碑文】 パーリ語面